

ごめんネの一言で



川本南小学校6年 図師 佑斗

ぼくは、学校の帰り道A君としゃべりながら歩いていました。そして、しゃべっていきうちにA君と争いになり、けんかをしてしまいました。ぼくがA君にきつい一言を言ってしまったのです。すると、A君は泣いて帰ってしまいました。その後、ぼくの心の中にはなにか大きく重たい物が、つまった感じがしました。心がいたい気がしました。その日の夜は、なかなかねむれませんでした。次の日、ぼくはA君にあやまろうと思いつきながら学校へ行きました。そしてぼくは、A君に話しかけました。A君は、むしをして向こうへ行ってしまういました。ぼくは、もっと大きく重い物が心につまった感じがしました。きのうなんてあんな事を言ってしまったのかと、自分がいやになり、こうかいしました。授業も耳に入らずA君の事自分のしてしまつた事を一日考えていました。楽しい時間は、あつというまに過ぎてしまつた。この日は、ものすごくゆつくりながれてるのを感じました。息がつかまるような思いました。この時ぼくは、友達とけんかをするだけでこんなないやな気持ちになるんだなと思ひました。その日ぼくは、結きよA君にあやまれずに家に帰りまし

た。ぼくは、明日こそ必ずA君にあやまるぞと心の中で思ひました。しかしA君にむしされるのかと思つた。明日がこわいという気持ちもありました。

いよいよ次の日になりました。学校に着くと、げんかんにA君がいました。そして急いでA君の所へ行きました。でも、A君の所に行つたのはいいけれどむしされるのがこわくてなかなか声が出ません。ぼくは、その時ドキドキしていたので心をおちつかせてからあやまろうと思ひました。

休み時間になりました。ぼくは、3分ぐらいたつてからまっさきにA君の所へ行きました。また、ぼくの心はドキドキしてました。A君は、他の友達と話をしていた。ぼくは、他の方まで話して次は、仕方なくあやまらざるぞと強く決心しました。

休み時間がありました。ぼくは、A君の所へ行きました。そしてぼくは、A君に「おとといは、あんな事を言つてごめんネ。」と勇気を出して言ひました。そうしたらA君が、「ぼくも、あんな事を言つてごめん。」と言つてくれました。ぼくは、うれしかったです。その時、もつと早くあやまれば良かったなと思ひました。そして元どおり仲良しの関係になりました。

ぼくは、このことをとおしてごめんネの一言できつづけてしまつた友達と元どおりの関係になれることがわかりました。「ごめん」この一言は、不思議で大切な言葉だという事をぼくは知りました。

夢

なかるべからず

さん さん
こと 誠
ま 誠
ひ 洋

ま 田島
た 田島

正解のない旅路の果てに



大空を翔る鳳凰

長く伸びた深緑色の多肉質な茎。その先端には華麗に大空を翔る鳳凰のような花。通称デンマーク・カクタスというシャコバサポテンは、クリスマス・カクタスとも呼ばれ、そ

の名の通り蕭条とした冬の窓辺を彩る。華麗な花は一見どれも同じ姿だが、丹精を込めて育てたが故に、その一つひとつの表情の違いを知る兄弟がいる。園芸家 田島誠・田島洋。兄弟は何万とある蕾一つひとつに瞳を凝らす。

譲葉の賦

⑨ 一天地六

可堂は、杉浦家を辞すると同時に塾を開いて子弟を育英することとなったが、この開塾と前後して幸と不幸が相次いだ。塾を開いた翌年に可堂は壬生藩鳥居家の士、横山光亭の妹常子と結婚した。可堂三十歳、常子二十五歳であった。この目出度い出来事と反して、不幸もまた可堂を襲つた。開塾の前年に母すみ子が亡くなったのである。さらに開塾の六年後には、最愛の連合を亡くしてからというもの、元気が無く病気がちであった父守道が亡くなった。

こうした悲しみを忘れるかのようになり、当時の可堂は江戸下谷青石横町に開いた塾での教授に没頭した。この可堂の桃井塾は、家こそ狭隘であつたが、可堂の教育者としての思想や態度は、当時の教育思想の最高水準のものであり、常に凛とした態度で当時の社会情勢に対する批判を行つた。このため、上下を問わず真剣に国家を憂える者は、先を争うようにして、この桃井塾へ参集したのである。特に備中庭瀬藩主の板倉撰津守勝貞に至つては、賓礼をもつて可堂を遇し、自ら師事するだけで

桃井可堂伝

なく、その藩臣の教授を二十三年間に渡つて可堂に任せる程であつた。桃井塾の開塾から十五年、可堂は塾生への教授に多忙な毎日を通つてきた。そんなある日、痛みを忘れていた可堂の心を再び引き裂くような知らせが届けられた。

「お常、わしは今から、故郷に帰らねばならなくなつた。すぐに支度を整えてもらいたい。」天を仰いでそう伝えた可堂の声は微かに震え、その手に握られた書状はくしゃくしゃになつてた。「何かあつたのですか。」「兄が、兄が危篤との知らせじゃ。たのむすぐに支度を……」

可堂の兄勘助は、弘化三年（一八四六年）にこの世を去つた。兄の背を追いかけたあの日、曝書に連れ出されたあの日、そして故郷を発つことを決めたあの日、それぞれの勘助の笑顔が、可堂の心に寄せては引く波のように湧き立ち、涙は止めどなく溢れた。

勘助が逝つたその日、中瀬河岸のあの木の下で、何時までも飽くことなく、唯ひたすらに利根川の流れる先を見詰める可堂の背は、悲しみに震えていた。

岐路での決断

兄弟が生まれる以前から、鉢物が一家の生活を支えていた。兄の誠（写真右）が生まれた頃に、シャコバサポテンを導入、その後、高冷地生産も開始。経営規模は拡大していった。だが、誠は夢を抱いて東京の



品質の良さゆえ、シャコバサポテンは年間35万鉢を生産し、日本一の生産量を誇る

大学に進んだ。更に調理師学校に入学し、調理師の世界に足を踏み入れ、都内のイタリアンレストランで腕を磨いた。

結婚も決まり、将来設計が見えて来た頃だつた。父が仕事に負傷した。「花」業界を代表する企業にまで成長した家業が、岐路に立たされた。誠は自身で己の決断を迫つた。誠は断を下した。園芸の道に

塩梅と按排

が継いで間もなく、弟の誠は今、市場で評価されている品質を落とさずに、自分たちで新たな事業展開ができないものか模索している。二代目のプレッシャーと闘い、日々試行錯誤を繰り返している。

誠は、鉢物栽培と料理に共通するものを感じている。どこまでも正解がない。自分の塩梅と按排で評価が直に伝わってくる。そこにマニュアルにない面白さを感じている。花が生活に溶け込んでいるような社会を目指し、正解のない旅路で何かを掴みつつある。

夢七訓

夢なき者は理想なし
理想なき者は信念なし
信念なき者は計画なし
計画なき者は実行なし
実行なき者は成果なし
成果なき者は幸福なし
ゆえに 幸福を求める者は夢なかるべからず※

※本文中の敬称は本人の承諾を得て省略しています。 ※洗濯米一か残したとされる「夢七訓」より。「夢なかるべからず」は「夢を持たないといけません」という意味。